



風の日は風が父なり半仙戯
大噓あの世へ妻をとばしけり
こころざし半ばの雪は積らざる
木の根明く赤子の鼓動聞くやうな
雛市をゆるりとめぐり浅草へ
春岬濤つんのめりつんのめり
指紋なき雛の白き手夜が来る
けふといふきのふのむくろ蟬氷
子を生みしことも遥かや木の根明く
春の海沈みしピアノ鳴り止まず
生涯に一本の鑿木の根開く
清貧をかたちに思へば枯野かな
毎日が生まれ変わりのや春の水
終焉を桜槽火に委ねたし

*

校庭の機関車磨く春休み
春禽の時は大いなる柩
あの山に冷つけえーあると秩父の子
雪解星眼ととのへ仰ぎたる
春帽子恋の卵をポケットに
芽ほどきの風曼陀羅を拝しけり
とっておきの母の肝魂春の月
阿賀野なり田母木の洞の温みある
北窓を開く早池峰山真新し
鷹化して鳩と為りたる結社かな
いちじくを割りて笑われたる気がし
退屈な余白の授業風生忌
シェリーの詩読み返しみる二月かな
海岸線泣けよ泣けよと雪がふる
秋の柘光はらみてほの淡く
韃靼の玉を砕きて霾晦

小林貴子
円城寺 龍
丸山靖子
唐澤南海子
古畑恒雄
久保美智子
田中純子
折井眞琴
柳澤和子
上脇邦子
荻原昭廣
原 菊美
小林さなえ
五味澄子

牧野きよ子
奥山源丘
田村道子
西牧千恵子
沖 裕子
篠田 游
高橋洋子
桎木幸子
安部克詠
塚原白里
手島 互
曦 達久
野尻一彦
薦田のり子
藤森岳仁
志摩晴樹

岳俳句・拓くことば 五月

(453)

宮坂 静生

はじめに。歳時記の季語の解説を知って、自分の中に「思
い込み」(先入観)ができる。実体験を通して、思い込みを
正すこと。歳時記の解説に合わせるのではなく、自分の体験
(見たり、聞いたり、思ったりすること)の方を詠むこと。

半仙戯のたのしみ

風の日は風が父なり半仙戯 小林貴子

ぶらんこは風が手助けをしてくれる。それが父だという。
それとなく暗示的な句。なにか心にわだかまりや悩みが溜っ
たときに、父のことを思うと、勇気が出て、助け舟を出して
貰った気分だというのであろう。ぶらんこは古来、中国の文
人や役人が楽しんだものという。若い頃は遊具にしか思わな
かったが、齢をとると、ぶらんこの効用をふと考える。自然
に身を揺するるのが現状を打破したい気分にはいゝ。

大噓あの世へ妻をとばしけり 円城寺 龍

なんと哀しく、心遣いの深い句か。読み手への読後をこれ
ほど慮った句は珍しい。妻を亡くした心中、他人がどんなに
悼んでも当人の哀しみにとどくはずがない。残酷ないい方を

木の根明く木曽の木地師の話好き 堤 保徳

木の根明く時期を踏まえ、その地面の丸い明き具合から出
産を思う。また鑿一本で生きた彫師の一途さや木曽の木地師
の人の好きまで連想を拡げた詩情からは自然と人間との交情
の深さがよく捉えられ、秀逸と思う。

雛市をゆるりとめぐり浅草へ 古畑 恒雄

一句のゆとり、遊びにどこか晩年の自在が伝わる。その通
りの行動を飾ることなく詠まれたのであろう。心の動きにま
ったく無理がない。シャイであり、美しい。

今月の秀句

けふといふきのふのむくろ蟬氷 折井 眞琴

切ない句だ。栄光の「きのふ」があり、「けふ」はそ
の亡骸だという。こんなに明快に今日をいい得るとは、
悟りをひらいた老人の心境か。蟬氷は初冬の氷とも春の
薄氷とも両説わかれる季語。私は後者。蟬の翅のような
薄い氷が早春には張る。掲句の主人公はロマンチスト。
蟬氷を見つめながら、過去の栄光をなつかしみ、現在と
の落差を感じている。そこが却って若々しい。格好よす
ぎか。

すれば、歲月以外癒す方途はない。十分承知しているからこ
そ、哀しみを戯画化した。不意に逝去したのであろう、大き
な噓であの世まで妻が飛ばされてしまった光景は、長新太の
マンガ絵だ。しばらく経ち、また噓に乗って別の世から帰っ
てくることはないか。ひよいとありそうな気がする。

ころろざし半ばの雪は積らざる 丸山 靖子

季節外れの雪を「ころろざし半ばの雪」とは、表現が巧
い。積もるつもりがないにもかかわらず降る雪。まじめさが
足りない雪。それでも天帝の命令であれば、聞かざるを得な
かったものか。さりげない擬人化の佳句。

木の根明く赤子の鼓動聞くやうな 唐澤南海子

いち早く雪消を迎えた大木の根周りの土がどきんどきんと
脈を打っているようだという。初々しい「赤子の鼓動」との
直喩が、春の訪れを暗示し、光景がいきいきとしている。今
月号には「木の根明く」佳句が揃った。

子を生みしことも遥かや木の根明く 柳澤 和子
生涯に一本の鑿木の根開く 荻原 昭廣

春岬濤つんのめりつんのめり 久保美智子

岩井かりんさんの名句「三日はや気が付けばもう前のめ
り」以来、小誌の意欲的な作者に火がついて、いま燎原は野
火が旺ん。掲句の「つんのめりつんのめり」は春濤の岬の崖
にぶつかる勢いを捉えたものであるが、迫力十分。そこに支
部合同句集『朴の花』を上梓し、意気の上がっている北陸の
春酣の容子が伝わる。

指紋なき雛の白き手夜が来る 田中 純子

「夜が来る」にどきっとした。夜はそんな白き手が跳梁す
る時間であろうか。昼はわかり易い具象の世界。夜は細部が
消された抽象の世界。雛飾りは愛らしいばかりではない人の
心中に秘む妖怪を連想させる。

春の海沈みしピアノ鳴り止まず 上脇 邦子

近くは、東日本大震災の津波に吞まれ、海底に沈んだピ
アノを連想したものであろう。もう弾き手がいないピアノが自
ら、海中で、以前盛んに弾かれていた曲を奏でている。ピ
アノの哀しみ。亡くなった弾き手ばかりではない。ピアノも身
をふるわせて哀しんでいる。

清貧をかたちに思へば枯野かな 原 菊美

清貧と枯野とは近い連想であろうが、今、戦後の清貧を改

拓くことば ②⑧ 自句寸言⑫「花ひらく」

花 ひらく 生徒総会 激し 夜へ 昭和43年

「鷹（昭和四十三年八月号）所載。初投句。雑詠欄は二二五人。八番目。三年前に小諸から松本県ヶ丘高等学校（縣陵）へ赴任した。宮下清計校長からすばらしい手紙を貰い、大学院行きを諦めて松本へ帰っていた。宮下先生は浜松中納言物語の研究者、戦後講談社から本を出していた。縣陵では初め生徒会係を担当。制服の自由化で揉めた。私は生徒の要求である自由化に賛成で、職員会で宮下校長の後の山田石男先生とやり合い、生徒の要求を認めさせた。前夜、生徒総会は揉め、翌日の授業ポイコットまで議論していたが、生徒の議論を引き取り善処したいと約束した。激しい時期の作。『山開』所収。

捨てマツチ地に燃え青春は霧か 昭和43年

「鷹（昭和四十三年十二月号）所載。寺山修司の歌を意識して「捨てマツチ」を出した演出。タバコは一切吸わない。祖国までは気にしなかったが、わが句で青春気取りの珍しい作。三十一歳である。たいした青春でもないが、この時からわが青春は集中的に爆発しない代わりに案外長いのではないかとの思いがあった。『山開』所収。

三十の骨嵩雪に雪つもる 昭和45年

どこにも発表しないで句集に収録したもの。大学時代の友人杉田聡の死（昭和四十五年四月二日）を詠む。「友焼くや雪の萱場の昏れなづみ」も同時作。その日は長女さおりちゃんの小学校入学の日。長野の自宅で小腸腫瘍のため逝去。三十三歳。四月四日、長野市吉田善敬寺での葬儀に生前尊敬していた澁澤龍彦夫妻、種村季弘が弔問。初めて両氏にお会いしたことが記憶にある。杉田はペンネーム花藻群三。秀逸な澁澤龍彦論を書き、長男に龍彦と名付ける熱烈な澁澤信者。遺稿集『龍神渚の少年』（昭和四十六年四月）には澁澤の序文が付く。わが友人の中でとびきり才能があったように思う。歳月が経ち、長男の龍彦さんは童話本の出版社を経営。杉田君の夫人、歌人である小百合さんがこのたび「岳」に入会された。『山開』所収。

地に近きものより芽ぐむ啄木忌 昭和45年

「鷹（昭和四十五年七月号）所載。木曾奈良井大宝寺吟行での囑目句。「捨葱の身おこす雨や子持仏」も同時作。春遅い木曾、わずかばかりの畑に乱雑に置かれた年を越した捨葱詠。啄木にも木曾人にも、捨葱に通じるなにかを感じた。モラルが出ないように気を使った。『山開』所収。

めて回想する作者のつつましい姿勢に清新さを感じた。大いに共感する。なんでも簡単に揃う飽食の今の貧困。かつての清貧がなつかしい思いさえする。人を思いやる心はかえって貧しくなっていないか。考えさせられる。

毎日が生まれ変わりとや春の水 小林さなえ

作者は画家。探求心旺盛なれば、一日一日出会いの喜びがある。今日の自分は明日の自分ではない。春の水も一瞬たりとも滞ることがなく流れてゆく。水は瞬るように次の瞬間には新しくなっている。われわれが気付かないだけだ。やさしい表現に深い見方が托されている。

終焉を桜櫓火に委ねたし 五味 澄子

子規は終焉を幻想した。隠亡ひとりが付き山中で柩がとことと火で焼かれる。明治三十年代頃は、そんな終焉もあった。現在は到底考えられないことであるが、作者の太い桜櫓火で焼かれるイメージは、すべてが整いすぎ死さえも寸分の狂いなく処理される秩序への反発であろう。桜木は特有の桃色の炎を上げる。あたかも花が咲いたような。

他に雪嶺集、前山集からの推薦候補作を掲げる。

脱兎のごとく山焼の点火役 奥山 源丘

山毛櫓の根の明くや老年にも大志 堤 保徳

ビキニデー水尾はた消すうねりかな 西牧千恵子

春禽の塙が柩とは

春禽の塙は 大なる 柩 奥山 源丘

鑑賞の付けようがない。春の夕方、小鳥たちが鳴きさげびながら集まっている大木をみる。「鳴きさげび」という点からは鳥の葬とも想像が及ぶが、こゝは一夜の宿所であれば柩とは違う。安楽なハンモックのようなもの。塙が柩とは意味の上からはむしろ正反対だ。ところが鳥は巣箱が子育ての場でもあり、葬の場でもある。鳥の葬とはなかなか想像しにくいので忘れているにすぎないのかもしれない。連想をたくましく、強引ながら、ねじ伏せられるように納得させられる。大胆な作。

あの山に冷つけえーあると秩父の子 田村 道子

「冷つけえー」とは水柱のこと。秩父方言。言われてみればわかる。名詞にしないで、形容詞を名詞代りに用いるという格好つけない生活感がおもしろい。秩父の与太たちの秘密の場でもあるような素朴さを掬い上げているのが秀逸。

雪解星眼ととのへ仰ぎたる 西牧千恵子

「眼ととのへ」のフレーズがあることによって、探し難い雪解の頃の星をしっかりと捉えた主人公の姿勢の凛々しさがよくわかる。地味な句であるが、北国詠として愛誦したい。

春帽子恋の卵をポケットに 沖 裕子

一見、軽く弾んだ句であるが、何回も誦していると、むしろ沈みがちなわが心を鼓舞するために、こんな光景を設定したのではないかと思われる。中七から下五にかけて、こんなに手軽な恋はあり得ないからだ。片思いという恋もあるうが、恋などという溢れ出すものはポケットには収まり難い。ニッキ入りの飴玉でも入れておくかのように仕舞いおく一句に、作者の体調の復調を思い祝福したい。春帽子も恋に近い装置であるが。

芽ほどきの風曼陀羅を拝しけり 篠田 游
率直なやさしい佳句。勿論「芽ほどきの風」で切れる。巧みな表現だ。寺の曼陀羅をしげしげと拝する作者の好奇心が芽吹きを背景に知情よろしく描かれている。

とつておきの母の肝魂春の月 高橋 洋子
元気な母。それにしても「とつておきの」の上五は迫力満点。困難な状況をもともしないで切り抜ける根性の据わった母の傍が見えるようだ。春の月は母への賛歌に置かれたもの。戦後は肝魂母さんがいたものだ。いまに健在とは珍しい。

阿賀野なり田母木の洞の温みある 柁木 幸子
田母木とはアオダモの木。作者のお住いの新潟県阿賀野辺では秋、稲架木にするために田の畔に植えられている。洞ができるほど歳月が経った木を想う。早春の光景がやさしい。

た余裕に感心した。「退屈なガソリンガール柳の芽 風生」からの着眼かとも思うが、見事という他はない。選択科目の授業なのであるが、高校生で句作をつづけ得たならば、将来大成まちがいなし。この一筋の気持が大切。めげるな。

シェリーの詩読み返しみる二月かな 野尻 一彦
イギリスロマン派の詩人シェリー (Shelley) が出ておどろいた。私も学生時代、抒情詩「雲雀に寄す」や「西風の賦」を愛誦した。小田幸雄という快活なアメリカ文学の先生にロマンティックポエトリーばかりを一年間習ったことがなつかしい。一年の底のような二月がこの句では生きている。

今月の秀句

校庭の機関車磨く春休み 牧野きよ子
第一線を退き陸に展示されている機関車。小学校の春休み。機関車磨きが当番なのであろう。チューリップの水くれや兎の飼育当番はしばしばある。象のような大きな機関車清掃が割り当てられた当番とはおもしろい。無雑作に詠まれた迫力がある。俳句で一番必要なのは、一句に込められた勢い。どかっと読み手にぶつかって来る作者の気合こそ俳句のいのち。南砺市の久保門下の作者、なかなか着眼が新鮮。

北窓を開く早池峰山真新し 安部 克詠
北窓を開いた春のよるこびが以下のフレーズから伝わる。日常風景がささやかな行為の変化によって輝く。些細なことにこそ感動がある。そこを見逃さないのが詩人。

鷹化して鳩と為りたる結社かな 塚原 白里
中国七十二候の一つに、啓蟄第三候(陰暦二月十一日から十五日)「鷹化して鳩と為る」がある。途方もない時候の作りごとの文句のおかしさから俳句結社のさまを想像し、からかったもの。かつて「鷹」の結社がいま「鳩」に。作者も在籍した藤田湘子主宰の結社の変貌ぶりを称したものか。時移ればそれも目出度い。変われば変わるものの謂か。

いちじくを割りて笑われたる気がし 手島 互
原句は下五が「氣する」であったが、リズムカルに添削。これ以上、些細なことがないほどのことを詠い、立派な一句にした。なぜそんな気がしたのか。私見では、いちじくの形はどこか妖しきがある。それを割り、中を見た行為に主人公自身がかすかにはに・か・んだものか。おもしろい。初投句の作者。

退屈な余白の授業風生忌 曦 達久
十七歳の青年にして風生忌(二月二十二日)を下五に据え

海岸線泣けよ泣けよと雪がふる 薦田のり子
作者は四国新居浜在住。暖国の雪。山国の雪とは違う。

「泣けよ泣けよ」に意外な雪に見舞われたおどろきが出て、口語調表現もよく気持を伝えている。あれよあれよという感じ。

秋の柘光はらみてほの淡く 藤森 岳仁
作者は、九州佐賀武雄市在住。こんな淡い句にはじめて出会いはった。「秋の柘」への着眼に詩人の心が光る。

韃靼の玉を砕きて霾晦 志摩 晴樹

「韃靼」はモンゴル民族の地。司馬遼太郎でなくとも、血湧くところ。春先日本へ襲来するよな(黄砂)は遠方モンゴルの珠玉を砕いた微塵だとの想像がたのしい。スケールが大きく、一句の光彩陸離。作者の志が伝わる。

次に岳集からの推薦候補作を掲げる。

祈りたき形となりぬ凍瀑布 野口美智子
木の間蝙蝠の眼のぎしぎしと 吉沢さよ子
人死ねば石屋が走る寒土用 円城寺 龍
分校に生徒がひとり卒業す 田中真由美
篝火を囲み村びと冬惜しむ 山崎 隆一
降りてくる風船欲しき地震の地よ 若月はつ江
将来は尼となる子よ蘆の角 矢島 栄子